

富山方言における「ゆすり音調」が持つ 機能に関する一考察

鈴木 基 伸 梅 野 由香里*

要 旨

北陸地方においては、「ゆすり音調」と呼ばれる句末の母音を伸ばして抑揚をつける独特のイントネーションがある。本稿では、北陸地方の中の富山方言に焦点を当ててデータを取り、「ゆすり音調」が果たす機能についての考察を行った。これまでの研究では「つよい訴えかけ」(吉田 1983)や「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話者自身の余裕を保つ」(山口 1985)という機能があるとされてきたが、筆者が採録した富山方言話者による会話データの中では、「ゆすり音調」がそのような意味機能を表している箇所は見られなかった。むしろ重要でない箇所に現れており、一種の「非焦点化」のような機能を持つことが観察された。結論として、ゆすり音調が「非焦点化」という機能を有しているのではないか、という仮説を提示した。

キーワード：富山方言、ゆすり音調、間投イントネーション、非焦点化

1. はじめに

本稿では、富山方言における「ゆすり音調」に焦点をあてる。北陸地方には句末の母音を一拍もしくは二拍伸ばし、そこに抑揚をつける特殊な音調(以下、ゆすり音調)がある。ゆすり音調に関しては、新田(1987)を最後に目立った研究がない。以下では富山方言の概要、ゆすり音調に関する先行研究について概観した後、実際のデータからゆすり音調がどのような場所に現れるかを観察し、先行研究(吉田 1983、山口 1985)によって指摘された機能だけでは説明できない用例があることを指摘したう

*大手前大学非常勤講師

で、別の新たな機能がある可能性について言及する。

なお、本稿の筆者（梅野）は富山県射水市出身であり、両親は富山県富山市出身である。出典が明記されていない、または引用であることが表記されていない例文については筆者の作例である。

2. 富山方言について

富山方言は親不知（新潟県）と浜名湖（静岡県）を結んだ線より西側の西部方言の中の小方言である北陸方言のひとつである（東条 1956）。下野（1983）によれば、県内の方言は均質であり、区分としては呉羽山を境にまず呉西と呉東に分けられ、さらに呉西は五箇山地方とそれ以外に分けることができる。

- (1) A 呉東（下新川郡、黒部市、魚津市、滑川市、中新川郡、富山市、婦負郡）
- B 呉西（新湊市、射水市、高岡市、小矢部市、氷見市、西砺波郡、五箇山を除く東砺波郡）
- C 五箇山（利賀村、平村、上平村）下野（1983：311f）

金田一（1974）の分類によれば、富山県全域が京阪式に分類されるものの、「ちがう方向に変化している」とされ、アクセントの区別は下がり目とその位置のみが弁別的特徴となっており、その点では東京アクセントと同類である。また二音節名詞第2類（旗、胸、橋、昼など）・第3類（倉、色、栗、波など）・第5類（雨、秋、鶴など）の語が、語末の母音の広狭によって異なる型に属する事実がある。語末が広い母音（a, e, o）の語は尾高型になり、狭い母音（i, u）の語は頭高型になる（下野 1983）。

3. 富山方言におけるゆすり音調について（先行研究の概観）

北陸地方におけるゆすり音調の研究には藤原（1969）、吉田（1983）、山口（1985）、新田（1987）があるが、ゆすり音調の呼称や定義付けについて一定の見解があるわけではない。以下、それぞれの研究について概観する。

3.1 藤原与一（1969）

藤原（1969）のタイトルは「越前の一小方言について」であり、福井県福井市織田町における方言調査をまとめたものである。その中で音声面、特に文アクセントが特徴的であるとして以下のように述べている。

- (2) 織田方言文アクセントの傾向を探索吟味して、類型的なものを求めていくと、私どもは、代表的・中核的なものとして、この方言を代弁するようなものとして、「ゆすりアクセント」傾向をとりあげることができる。一步、当地方にはいればただちに耳にすることができる、あの異色あるふしまわしが、ここに言う「ゆすりアクセント」である。 (藤原 1969 : 78)

藤原 (1969) は「ゆすり」の実体として話部末または文末において、I 音節の母音がいくらか伸び、長音部の後半で上昇するもの (3, 4)、II 延伸音を含む一まとまりのものの上に高音隆起 (ゆすり) が起こるもの (5, 6) の二種類を認めている。

- (3) カーチャンカ° (↑)
(4) イッカイスルトー (↑)
(5) ホンデーエー (↑↗)
(6) アノーオー (↑↗)

ただし「ゆすりアクセント」として代表的なものはIIの方であり、「活動力が大きい」としている (藤原 1969 : 80)。

また「ゆすりアクセント」の使用者について、男性より女性の方が多く用いられ、老年男性にはあまり見られないとしている。また児童には男女問わずまんべんなく使われていると述べている。さらに「ゆすりアクセント」は越前地方のことばであるとし、石川県ではあまり聞かれなかった。起源は京都ことばに求められ、福井県における「近畿地方主体のことば」と「中部地方北側 (北陸側) 大部分のことば」とが接触した際に起きた特異な文アクセント傾向ではないかと分析している。

3.2 吉田則夫 (1983)

吉田は福井県大野市出身であり、福井県丹生郡織田町笈松方言 (『全国方言資料』3カセットテープ3-1B) の談話テキストを基に分析を行った。吉田 (1983) はゆすり音調を「『ゆすり』調」と称し、藤原 (1969) が二分類したもののうちのIIのタイプに該当するとしている。またこの音調をもって以下のように記述している。

- (7) この音相は、同一母音の連続上に上昇と下降とが実現されているわけで、まさに声を「ゆする」ごとき音調である。この「ゆすり」調の聞こえの印象は、他地域の人びとには、きわめて異色の感を与えるものと言えよう。

(吉田 1983 : 11)

またゆすり音調の機能について以下のように述べている。

- (8) この音調が、文構造上、文末の文末助詞の上にあらわれている場合には、相手へのつよい訴えかけ機能が感じとられるように思う。また、文中の接続詞や接続助詞上にあらわれる場合には、訴えかけとともに、表現の一時的な中止的効果というべきものが感じとられる。「ゆすり」音調をとることによって、そこで次の表現への構えを整えるといったような趣がある。

(吉田 1983 : 11)

3.3 山口幸洋 (1985)

藤原(1969)がⅡに分類したものをさらに下位分類し、「句末の音節が長音化した上さらに独立した1シラブルの長母音を発声させたもの(再長音化)」を別立てした。そしてこれこそが「北陸路方言に共通する話題の特有のイントネーション」と述べている。そして当該音調の呼び方と機能について以下のように述べている。

- (9) 「ゆする」とか「ゆすり」とかはちょっといただけない呼称である。句末で波うつような抑揚は事実であるが、その事象が現実の会話にどのような意味をもつものであるかをよく考えると、(中略)東海地方の方言でよく用いる間投助詞と同じ役割を果たすものであるとしてまちがいない。間投助詞はいうまでもなく、話者の詠嘆的感情など単なる感声表現を聞手に投げかける助詞で、文中文末の適宜の文節末にしばしば現われ、その効果は「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話手自身の余裕を保つ」というところにある。東海地方では各地域でさまざまな方言形が活発に用いられている。(中略)「ゆすり」現象の使われ方は、まさに東海地方間投助詞の「適宜の句末に用い、聞手の注意を…」とぴったり適合し、それに代るものとみられるのである。すなわちその役割は「間投」的なものである。次に「アクセント」という呼称であるが、アクセントは弁別非弁別を問わず、何らかの語形に伴う上昇下降についていうとすれば、これは語形そのものが定まっていず、上昇下降に対してはむしろ語形の方が付带的である。したがって、これをイントネーションというのがもっとも適当であろう。そこで当該事象を「間投イントネーション」と呼ぶ。

(山口 1985 : 217)

また山口(1985)は「ゆすり」について、それが「句末の上昇」と「卓立下降」が組み合わさったものであるとすれば、「東海地方の方言や東京語にもみられる句末な

いし文末のイントネーションと何ら変わらない」(山口 1985 : 217) と述べているものの、「しかし北陸方言のイントネーションは実際に耳にすると、私どものとは歴然と違う何か独特の調子を感じる」(山口 1985 : 217) とも述べている。その原因については、「イントネーションとその実現する文環境あるいは文全体のアクセント的環境との関わりがある」(山口 1985 : 218) とした。また山口 (1985) の中でデータとして挙げた福井県武生市中津原で採録した談話からは、ゆすりに相当するものは多く見られたものの、再長音化 (3 拍分伸びる) したものはなかったようである。一型アクセント方言である下中津原方言では再長音化は見られないが、二型アクセントである織田町、福井市荒木新保、成願寺、松岡町などでは見られるため、アクセントの型が再長音化に関係していると述べている。また藤原 (1969) はゆすりは石川では使われないとしたが、山口 (1985 : 222) は「石川、富山地方に広く行われている代表的なものであることは確実と考えられる」としている。

3.4 新田哲夫 (1987)

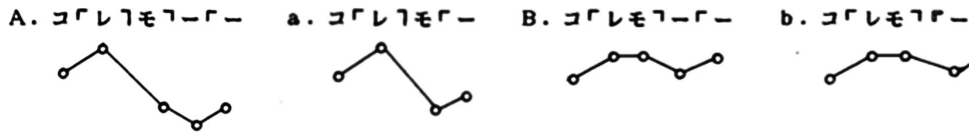
新田 (1987) は当該音調について、「現象面では、音調のくぼみこそがこのイントネーションを特徴づけるものと考え、やや視覚的な言い方ではあるが、「くぼみ音調」と呼んでも差し支えないとかがえる」とし、これまであった「ゆすりアクセント」「ゆすり調」という呼び方を採用せず、「くぼみ音調」と呼んだ。また機能面に関しては山口 (1985) が機能面から付けた「間投イントネーション」という名称や「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話者自身の余裕を保つ」という機能については同意している。

新田 (1987) は①新田自身の内省 (福井県福井市日の出町生まれ、一型アクセントの持ち主)、②『全国方言資料』第 3 巻 (日本放送協会編 1981) 所収の福井県丹生群織田町笈松方言、③『方言談話資料』(4) (国立国語研究所 1980) 所収の福井県武生市中津原町方言、④金沢方言 (新田が採取したデータ)、の 4 つのデータからゆすり音調についての分析を行った。そして①②③のデータから帰納的に得られたゆすり音調の特徴について以下のように述べている。

- (10)(i) この音調が現われるところは、諸説のとおり長音化するが、各方言ともその長さは最大 2 モーラ分で、その範囲内で長音化する。
- (ii) 各方言において、この音調について共通するものは、末尾の長音の上に被さった音調のわずかなくぼみである。
- (iii) 音調のくぼみを形成する直前に大きな下降のある場合とその下降がない場合がある。

(新田 1987 : 20)

そして以下のような4つのタイプを提案した。



新田 (1987 : 20より抜粋)

大文字のAタイプBタイプは句末のモーラが2モーラ分延長されたものであり、小文字のaタイプbタイプは1モーラ分のみ伸びているものである。そしてA・aタイプはくぼみの前にはっきりとした下降を伴うもの、B・bタイプは下降が現われないものである。A・Bタイプは山口 (1985) の「再長音化」したものに相当する。

新田の内省報告によれば、福井市方言においては下降を伴うA・aタイプのみが現われ、B・bタイプは例外的だということであった。また現われる位置については「任意の文末節に現われ得る」(新田 1985 : 23) とし、特定の位置については明言せず、以下のような記述に留めている。

- (11) これらが発話文内部のどこに現われやすいかは、文の構造そのものや、topic や focus などの言語的要因が絡んでいるかもしれないし、また、その全体的な頻度については、対人や置かれた場面によって選択される発話のスタイル、年齢や性やパーソナリティ等発話者の属性に関する言語外的要因が絡んでいるかもしれない。(新田 1985 : 23)

ただ文末に現われる場合は断定を表す助動詞やを伴う場合に限定され、その場合は、「〈いいかい、お聞き（ごらん）…だよ〉というような相手に対して強く訴えかける場合」(新田 1987 : 24f) だとしている。またや以外の助動詞やその他の助詞を伴う場合やそれらが伴わない場合にはゆすり音調は現われず、それに伴う長音化も現われないとしている。

新田 (1987) はゆすり音調を山口 (1985) と同様に、間投イントネーションと位置付けており、その理由として間投助詞「ノー」と共存しないことを挙げている。

- (12) くぼみ音調の後に間投助詞が現われたり、文節末に間投助詞を置いてその上にくぼみ音調を形成したりするようなことはない。いくら強く相手に訴えかけようとしても、2つ重ねて間投的機能を強調することはできない。

(新田 1987 : 30)

「訴えかけ」という機能の他に、「区切り」の機能もあるとしている。

(13) トナリノウチノコドモノー イヌ

(14) トナリノウチノー コドモノイヌ (以上、新田 1987 : 32)

新田の内省ではなく、織田町笈松方言と武生市下中津原町の録音資料からの分析では、福井市とは異なる特徴が見られたとしている。

【織田町笈松方言】

- ・福井方言で現われなかったB型がある。
- ・間投助詞ノーに当該音調が被さっている（共存しうる）。ただし一例のみ。

【武生市下中津原町方言】

- ・B型、b型が見られる。

これにより、ゆすりのパターンや機能が地域によって異なることがわかる。

先行研究については、藤原（1969）の分類について、「筆者がくぼみ音調と名付け、北陸独特のものとしたものは、藤原氏が認められるものより、限定されていたものなのかもしれない」としており、ゆすり音調の認定については吉田（1983）や山口（1987）に近い。モーラ数の延長に関しては、藤原（1969）や吉田（1983）が3モーラ分の延長を認めていることに対し新田（1987）は2モーラ分しか認めていない。またゆすりの形についても、山型ではなく「くぼみ」こそがゆすり音調の認定に関わるとし、それまでの先行研究とは立場を異にしている。さらに山口（1987）が例示した「単純段落下降」「句末卓立再下降」「句末段落下降」のタイプについては新田自身の内省からすると違和感があるとし、山口（1987）とは音調の認定の点で異なる可能性があると述べている。

新田（1987）はそれまでのゆすり音調の研究に出てこなかった金沢方言についても言及している。福井と金沢のゆすりの違いについて、①金沢市方言ではアクセントの影響下でこのイントネーションが現われること、②間投助詞と共存する、ということを挙げている。最後に、ゆすり音調の使用範囲については以下のように述べている。

- (15) 東は富山県滑川市（入善町では使わないという学生の報告あり）、西は福井県名田庄村で使用されているのを知っているが、それより外の地域でも使用されている可能性が高い。特に北陸各県東部南部の山間部についての知識が乏しい。
(新田 1987 : 45)

3.5 先行研究のまとめと問題点

以上、ゆすり音調に関する先行研究を概観してきた。まず問題として挙げられることは、名称が研究者によって異なるということであろう。藤原(1969)と吉田(1983)は「ゆすり」という呼び方をしている点では共通しているが、藤原(1969)は「ゆすりアクセント」、吉田(1983)は「ゆすり調」としており、微妙に異なる。山口(1985)は抑揚の形に着目すること自体に疑いを持ち、間投助詞的な機能を有することから「間投イントネーション」と称している。そして新田(1987)は「間投イントネーション」と呼ぶことには同意しているが、「ゆすり」と称することはせず、音調のくぼみこそが当該音調を規定するものだとして「くぼみ音調」と呼んでいる。そして上記の先行研究概観の中では触れなかったが、『日本のふるさとことば集成』(国立国語研究所 2005)の中では、「うねり音調」という呼称が採用されている。このように名称が研究者によって異なるのは、当該音調をどのように定義するのかということがそもそも定められていないからであろう。上述したように、研究者によってなにをもってゆすり音調とするのかが異なっており、ある研究者によってゆすり音調だとされたものが、別の研究者では認定されないこともある。つまり、独特な抑揚があることはわかっているものの、それがどのように定義され、なにをもってゆすり音調とするのかが定まっていないということが大きな問題点の1つだと言える。

また、ゆすり音調の分布に関しても、藤原(1969)は石川県では見られないとしているが、山口(1985)、新田(1987)では北陸地方に見られる音調だとしており、これも統一見解がでているとはいえない。さらに県ごとの細かい分布に関しては未だ調査されておらず、富山県も例外ではない。機能面においても間投詞的な働きがあり、「強い訴えかけがある」(吉田 1983)、「相手の注意をひきつけ、たえず反応をたしかめつつ、話手自身の余裕を保つ」(山口 1983)という点については検証が十分であるとはいえない。

4. ゆすり音調の定義

本節では、なにをもってゆすり音調とするのかという定義づけの部分扱う。新田(1987)は『方言談話資料(4)』(国立国語研究所刊)に収録されている音声データ¹⁾の中からゆすり音調がでている箇所をいくつかピックアップし、その抑揚のパ

1) 福井方言の録音データは以下の通りである。

録音年月日：昭和50年8月19日

話者A：男性、70代、福井県武生市下中津原町生まれ、当時も下中津原在住。

話者B：女性、60代、福井県武生市下中津原町生まれ、当時も下中津原在住。

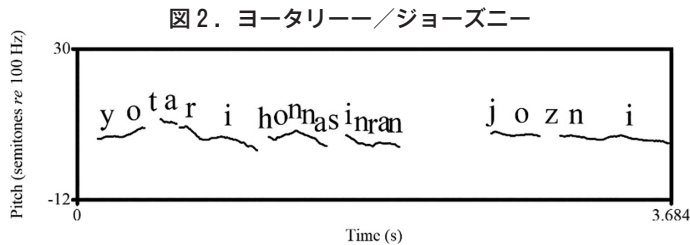
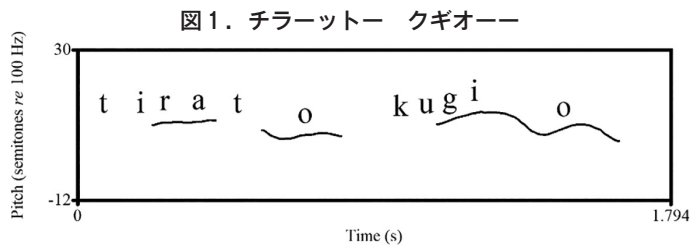
ターンを補助記号で表している。(「 : 大きい下降、「 : 大きい上昇、ˆ : 小さい下降、ˆ : 小さい上昇)

(16) チョット チ「ラーッ」ト「ー ク「ギ」オˆー「ー

(17) アノー ヨー「タ」リˆー「ー

(18) 「ジョーズニˆー「ー

新田 (1987) は音調の「くぼみ」に着目しているため、いずれも最後の拍の直前で上昇していると記述した。ただ「ゆすり」と表現した藤原 (1969) では「高音隆起」という表現がされているため、最後にピッチが落ちることもポイントだといえる。上述の例が実際にどのようなピッチパターンを取るのか、音声分析ソフト Praat を使用して計測してみた。以下にピッチの図を提示する。



ピッチパターンを見てみると、ゆすり音調の箇所では、いずれも最後にピッチが落ちていた。新田 (1987) はその落ちる前の「くぼみ」に着目したのだと考えられるが、それだけで終わるわけではないため、最後のピッチの下降まで含めてゆすり音調と認めるべきであろう。本稿で「ゆすり音調」という名称を採用しているのもこのためである。そこで本稿では句末で拍が伸びたところに高音隆起、つまり上昇して下降するというピッチが認められるものをゆすり音調とする。さらにその高音隆起が生じる前には下降が伴うことも条件に入れる。次節で紹介する方言データを見ると、いずれも高音隆起の前にピッチの下降が見られた。これは高音隆起を起こす準備としての下降

が必要となるからであろう。以上のことを考慮し、以下のような定義づけをする。

- (19) ゆすり音調は、句末の母音を伸ばし、そこに下降、上昇、下降という抑揚を与えるものである。

また、ゆすり音調は文節末のイントネーションであり、語のアクセントパターンやアクセントの幅に影響を与えるものではない。あくまで文節末がゆすれるものであり、それ以外のピッチの変化はゆすり音調とは別のイントネーションによるものだと考える。

5. 富山県南砺市方言におけるゆすり音調

5.1 音声データ

次に筆者（鈴木）が採録した方言データを提示する。話者Aは筆者が勤務する大手前大学の学生である。話者Aに依頼し、話者B（話者Aの母親）と電話で30分程度会話してもらい、それをICレコーダーで録音した。個人情報を除いたデータの公開については両者から同意を得ている。

【録音データ】

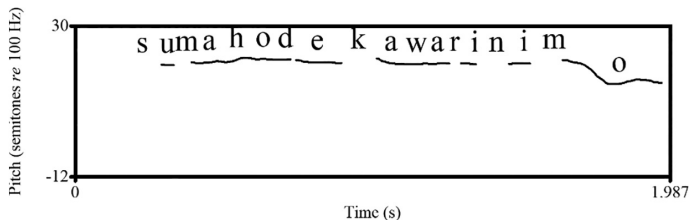
話者A：男性、20代、富山県南砺市（福光）出身、18歳まで富山県南砺市に住む。

現在は兵庫県西宮市に在住。

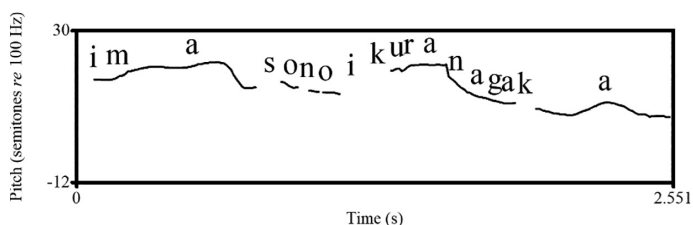
話者B：女性、50代、富山県南砺市（旧井口村）出身、現在も南砺市（福光）に在住。

※提示するデータはすべて話者Bのものである。

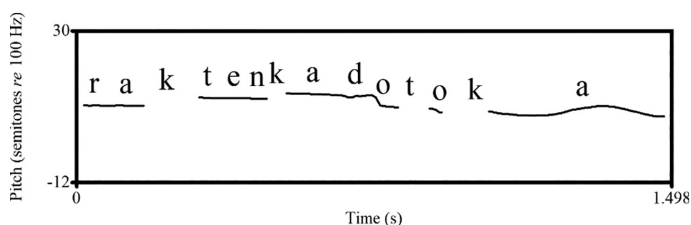
- (20) 【話者Aが話者Bの持つアップルウォッチが欲しいという話の中で】 スマホでかわりにもーおー、アップルウォッチで電話にでたいとかならちょっと高いげん。



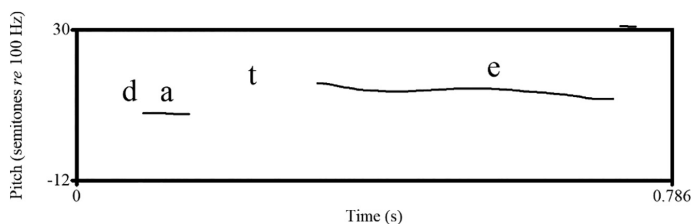
- (21) 【アップルウォッチの値段について話す】いまー、そのいくらながかー、わからんけどー、お母さん買ったときはそれぐらいで買えた。



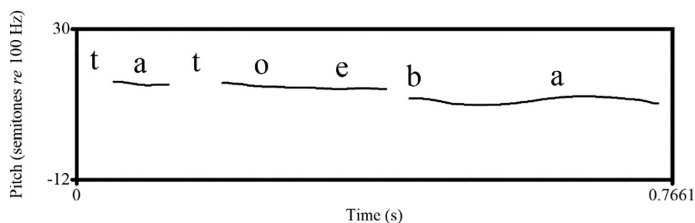
- (22) 【アップルウォッチの支払い機能について】わたしー、たとえばー、お母さんもつとる楽天カードとかあ、そんながを登録したらーできるはずやよ。



- (23) だってえ、口座とか登録してしまったらそれで大丈夫なんじゃないかな。



- (24) 【公務員の仕事について話す】公務員試験を受けて、その中の範囲の、例えばー、そのー、文化財の資格をもつとる人にはあ、

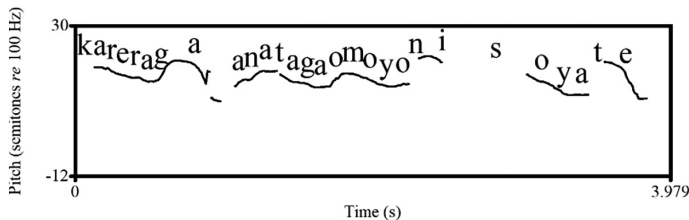


5.2 分析

データを見ると、話者A（男性）よりも話者B（女性）の方がゆすり音調の使用が多かった。これは藤原（1969）の指摘と一致する。年齢の違いもあるかもしれないが、男性の発話でゆすりが出ることはほとんどなく、出たとしてもゆすり自体はわずかなものであった。女性の方はたえずゆすれていて、40分程度の会話の中で30回以上ゆすりの箇所があった。

ゆすりの箇所を見ると、先行研究でいわれているような「念押し」や「聞き手の注意をひきつける」といったことがなされているところに出ているようには感じられなかった。むしろ「楽天カードとかあー」「だってえー」「例えばー」のように、そこまで重要だとはいえない箇所にゆすり音調が出ていた。話者Bの発話を聞いていると、ゆすりが出そうで出ないところがいくつかあった。それは、話者Bが話者Aに対して強い主張をしていると思えるようなところであった。以下その例を提示する。

- (25) 【話者Aと友達との話について】彼らがあ、あなたが思うようにい そやてえ



下線部の箇所では上昇・下降調の形はとるものの、母音が伸びてそこに下降・上昇・下降という、本稿が基準とするゆすりのパターンは出ていなかった。この場面は話者Bが話者Aに対して強く訴えかけているところであり、先行研究の分析に従えばゆすり音調がでてもおかしくないはずであるが、実際には出なかった。

6. ゆすり音調が持つ機能について

前節で観察したように、先行研究で言われているような機能だけでゆすり音調を説明できないとなれば、それ以外にどのような機能を持つと考えられるだろうか。観察したデータから分かったことは、「念押し」や「聞き手の注意をひきつける」ような文脈であっても用いられない場合があるということであり、逆に重要でない情報に対して用いられうる、ということである。「念押し」や「聞き手の注意をひきつける」

ということが焦点化の一種であるとしたら、それとは逆の「非焦点化」の機能がゆすり音調にあるのではないか、という予測が立てられる。本節ではゆすり音調が非焦点化と関係する可能性について考察してみたい。

郡(2020)は、「レモンでゼリーを作ったんです」という例文を用いて、フォーカスとアクセントの関係について述べている。「レモン」にフォーカスを置く場合、以下のようなピッチパターンとなる。

(26) レ[↑]モ[↑]ン[↑] デ[↑]ゼ[↑]リー[↑] オ[↑]ツ[↑] タ[↑]ッ[↑] タ[↑]ン[↑] デ[↑]ス (郡 2020 : 52)

このように、「レモンで」の「で」を高く言ってすぐ下げることにより、「レモン」にフォーカスが置かれるようになる。フォーカスを焦点化の一つと解釈し、郡(2020)の例文を富山方言に置き換え、焦点化される箇所とゆすり音調の使用について見てみよう。共通日本語においてフォーカスを置きたい文節末を高くする代わりに、富山方言ではそこにゆすり音調が現われるのか、ということを検証する。以下の例文におけるゆすり音調使用の適切性は、筆者(梅野：富山県射水市出身)の判断によるものである。

まず、「いつもは違うものでゼリーを作っているが今日は特別にレモンで作ってみた」という状況でレモンに焦点を置く場合の例文を見てみる。

(27) 今日(～)、レモンでゼリー作ったが²⁾。[焦点：レモン]

この場合、「レモンで」にゆすり音調が用いられることはない。区切ることなくひとかたまりの述部として「レモンでゼリー作ったが(レモンでゼリー作ったよ)」とするのが自然だといえる。したがってゆすり音調で「レモン」を焦点化することはない。共通日本語と同様、ピッチを変えること(「レモン」の「モ」のピッチを少し高くする)で焦点化を行う。なお、焦点化の対象とならない「今日」にゆすり音調を置いても問題はない。

次に、同じ「レモンで」に焦点を置く場合でも、「レモンでゼリーを作った」と言っているのに「メロンで作った」と勘違いされ、「レモンで作った」ということをより強く主張したい場合の例文をみてみよう。

2) 文末の「が」は富山方言における終助詞である。共通日本語における「の」に近い機能を持つ。また富山方言ではラ格がしばしば省略されるため、本稿の例文においても省略して作例した。

(28) 今日 (～)、レモンで㇏ ゼリー作ったが。[焦点：レモンで]

この場合であっても「レモンで」にゆすり音調が出ることはない。焦点化は(27)と同様ピッチを変えることで行われる。(27)は「レモン」の「モ」を強勢していたが、(28)ではさらに「で」にも強勢を置く。結果として「LHLH㇏」のようなピッチパターンとなる。また焦点化とは関係ない「今日」にゆすり音調を置けるのは(27)と同様である。

次に「ゼリー」に焦点がおかれる場合を見てみる。「いつもレモンジュースばかり作ってきたが、今回はゼリーに挑戦した」という状況の例文である。

(29) 今日 (～)、レモンで (～)、ゼリー作ったが。[焦点：ゼリー]

これまでと同様、焦点化の対象となる語(「ゼリー」)にはゆすり音調は用いられないのが自然である。焦点化は「ゼリー」の「ゼ」のピッチを高くすることで行われる。また焦点化とは関係ない「今日」にも「レモンで」にもゆすり音調を置いても不自然ではない。

では、最後に、文脈を設定せず文末以外の全ての名詞句にゆすり音調を置いた場合、どのような意味になるかを考えてみよう。

(30) 今日～、レモンで～、ゼリー～作ったが。

富山方言母方言話者の筆者(梅野)としては、(30)のように「今日」「レモンで」「ゼリー」のいずれの語句のピッチが高くなることもなく均等にゆすり音調が出ている場合、どの名詞句にも焦点が置かれていないと解釈される。また、ゆすり音調がでない「作ったが」が重要な情報になるというわけでもない。この場合、「今日～、レモンで～、ゼリー～作って～…」というように、ゆすり音調が出る句の後部に更に何か他の情報があると解釈されうる。

以上、富山方言話者である筆者(梅野)の内省に基づく分析によるものであるが、焦点化される名詞句にはゆすり音調が置かれることはないことがわかった。これは第5節で紹介した音声データに見られた結果と合致する。これらのことから、富山方言におけるゆすり音調はこれまでの先行研究で言われている、ある種焦点化と言える機能とは逆の「非焦点化」という機能を有しているのではないかという予測が立てられる。そしてそれに伴い以下のような仮説を提示したいと思う。

(31) 富山方言のゆすり音調には非焦点化の機能がある。

この仮説を検証するためにはさらなるデータと検証が必要であるが、本稿ではこの仮説の提示にとどまる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、富山方言で用いられる「ゆすり音調」に焦点を当て、その定義付け、データ分析を通じた機能の分析を行ってきた。音声データを分析すると、重要もしくは焦点を当てるべきところにゆすり音調が用いられず、むしろ情報の重要度がそれほど高くなくところにゆすり音調が置かれる傾向があった。このような事実からゆすり音調には「非焦点化」に関わる機能があるのではないかと考え、富山方言話者である筆者（梅野）の内省と合わせてゆすり音調には非焦点化機能があるとする仮説を提示した。本稿では仮説の提示にとどまったが、さらなるデータの収集と分析を通して、仮説の妥当性を立証していきたいと思う。

参考文献

- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房。
国立国語研究所（2005）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成〈第10巻〉富山・石川・福井』国書刊行会。
郡士郎（2020）『日本語のイントネーションしくみと音読・朗読への応用』大修館書店。
柴田武他（1977）『岩波講座11 方言』岩波書店。
下野雅昭（1983）「富山県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会。
杉藤美代子【監】（1997）『日本語音声〔2〕アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂。
新田哲夫（1987）「北陸方言の間投イントネーションについて」『金沢大学文学部論集 文学科篇』7、p. 19-48。
東条操（1985）「日本方言区画 解説」『日本方言地図』吉川弘文館。
藤原与一（1969）「越前の一小方言について」『国文学攷』50、p. 76-85。
山口幸洋（1985）「福井方言の間投イントネーションについて」『音声の研究』21、p. 213-222。
吉田則夫（1983）「「方言文アクセント」についての一考察」『方言研究年報』26、p. 3-17。

音声データ

国立国語研究所（1981）『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料(4)―福井・京都・島根―』